

東総地域社会史と大原幽学研究 成果と反省にかえて

高橋敏

はじめに

本報告は、個々の共同研究員の研究分野・問題意識によってアプローチのあり方は多様となったが、緩やかなまとまりとして「大原幽学と東総村落社会」の意識を共有することで合意している。従って論文のまとまりは大原幽学に関するものと周辺から基盤となった東総の村落社会に二分された。

資料について

大原幽学に関する研究は、当初から幽学の「思想」なるものに取り組む意図を持っておらず、幽学と門人道友性学教団が行った活動を第一次史料に使用して分析することであった。

まず、旧来の幽学研究が、幽学が脚光を浴びることによって成立した農村復興の立役者幽学像と愛国者・教育者幽学像をつくりあげることになった全書と全集の制約を戦後五十余年経過してなお受けていることであつた。全書・全集の恣意性を疑い、原典・原文書に立ち帰ることが出発点であつた。とはいえ、幽学関係資料は明治大学の木村礎グループの地道なフィールドワークにもかかわらず資料散逸が目立ち、これを克服したと言ひ難い。本論集は、出来る限り原典を読解し、分析すること

を心懸けた。そのため大原幽学関係資料と遠藤家文書の多くをマイクロ撮影し、利用に供するよう配慮したのである。

大原幽学と性学教団

大原幽学研究の原点ともいふべき関連資料論を取り上げたのが、鈴木映里子の「大原幽学の基礎的考察―大原幽学全書・全集本の検討」「奉行所本」を中心に―である。大原幽学記念館の学芸員として関連資料の保存公開を担当する鈴木ならではの基礎研究である。奉行所本の発見によって中井信彦・木村礎によって切り拓かれた幽学の資料論にひとつの道筋をつけるものである。それだけ幽学関係資料は幽学直筆にせよ、書き直し・編纂が幽学の手で行われている。また、多量の文書が生み出された江戸訴訟では、関係者がさまざまに作成・下書きしており、実際に勘定奉行所へ提出されたものか否かが錯綜している。しかも、訴訟を有利に導くため捏造している事例も少なくない。従って、恣意的編集方針をもって編まれた全書・全集が幽学の実像を示すと考へるのは間違ひである。今後は十二分な史料批判を加え、他史料との比較検討の上に分析は深められるべきである。鈴木論文は幽学研究の資料について、その原点を示したものととして貴重である。

松丸明弘「大原幽学と性学門人集団―前夜組織の成立と展開―」は、漂

泊者幽学がいかに東総地域の村落に定着、性学なるものを布教するに至ったかを克明に追究している。漂泊の宗教者幽学の実像、東総長部村への入村の経緯を実証している。天保八年・九年、年間七二回・七五回も漂泊を続ける幽学に驚かされる。本書のねらいは地域の基礎信仰(教育や文化で良い)が漂泊する宗教者・文人と定住する地域社会の交流の中で生まれ、変容することを裏づけることにもあった。漂泊から定着した幽学が村落社会へ浸透する手段として組織したのが「前夜」であった。前夜の構成員を一人一人追究することから教団の実態に迫る手法を駆使している。

高橋敏「大原幽学と改心楼の造営」は、幽学の東総村落への布教の拠点となり、シンボルとなった改心楼の建設を、残された普請関係の第一次資料を分析して明らかにした。支配の村々を越え、広範に動員された勧進の人足や資材等は膨大なものとなり、これに費やされた資金は五百両近くに達した。牛渡村一件から江戸訴訟に発展した幽学摘発の要因は、改心楼の造営にあったともいわれる。事実、江戸訴訟に提出された諸費用に比して実際五倍に及んでおり、幽学の実像が全書・全集につくられたイメージと随分異なることが明らかにされた。必ずしも関東取締出役の摘発の根拠が嘘であったとはいえないのである。改心楼という大規模宗教施設の建設にこだわる幽学とは何者であったのか。突如、嘉永三年(二八五〇)長部村八石の山陵に出現した改心楼の異様さは、大原幽学と東総村落社会の関係を如実にあらわすシンボルであった。

本共同研究の狭義の目的に取り組んだのが、栗田則久の「香取郡山田町所在性学墓の測量調査報告」と米谷博「大原幽学門人の墓について」、これらを補足したのが朴澤直秀「諸徳寺村永命寺末寺引直し一件」である。栗田論文は、考古学の手法を駆使して幽学と性学教団の特異さを物的証拠として後世に伝えるとされる性学墓を正確に測量し、実態を克明に報告するものである。近年、改変が激しい性学墓を保存に向けて正確に記録した実態調査として貴重である。そして、墓碑のみならず土塁配置

その他その全体像を掌握したことによってモノ資料による比較が可能となり、幽学の性学の特性に迫るものがある。

米谷は、幽学研究を前提に墓制に限定して広汎なフィールドワークによる実態調査を行った。婦命台、小日向をはじめ長部、鍋木から遠く滋賀県石部町、静岡県三島市箱根接待茶屋、名古屋専松寺大尊寺まで含括している。幽学生前から墓制への思いがあったと思われるが、没後二代遠藤、三代石毛の継承される中で墓制の改変が行われた性学墓なるものがつくられたとしている。

朴澤は、幽学の有力な基盤村であった諸徳寺の寺檀関係に着目し、村の寺門徒永命寺が末寺の東栄寺から如何に自立していったかを「末寺引直し」一件記録から分析した。

川上順子「吠とカマス―東総地域の生活習俗と大原幽学―」は大原幽学の村長部の生活習俗を丹念に民俗調査を重ねることによって幽学の改革の痕跡を追究しようとしている。幽学は年中行事をはじめ村と家の儀礼のあり方にこと細かく介入し、性学教団の組織化を断行した。習俗の改変の実態をカマスツキアイ、カマスナカマにみようとすることもあ

東総村落社会史

共同研究のもう一つの目的は東総とその周辺を含めて広汎な社会・経済・文化にわたる個別分析を深化させることにある。大原幽学の周辺は、九十九里に代表される干鰯生産の地であり、銚子は醤油で栄える一大流通の拠点であった。利根川の下流域から河口地帯は巨大消費都市江戸と連なる一大流通圏を形成していた。一方では、黒潮に乗って引き起こされる東西文化の交流、東総の開発の担い手は黒潮に乗ってやってきた紀州や伊勢の開拓者であった。

後藤雅知「正徳・享保期における下利根川中流域の漁業と村々」は東総地域社会史にとって欠くべからざる利根川流域漁業を取り上げる。正

徳・享保期佐原・篠原・津宮三か村と上流村々の漁場請負人との間に争論が展開した。争論の背景には巨大都市江戸の魚市場と需要があり、請負人のうしろには江戸魚問屋が控えている。運上金をめぐる幕府の動きや、流域村々の利害の絡み、地引網等漁法の進歩と江戸との関連を深めるなかで変貌を遂げていく東総村落社会を展望するものとなっている。

阿部綾子「銚子における「旅漁師」と「旅商人」の定着過程に関する一考察」は、十七世紀銚子に漂着・定着した紀州の古座家、伊勢四日市の野崎家をそのルーツを遡って分析した。

「旅漁師」「旅商人」の定着はこの地域にとつては常識であるが、文化・信仰の伝播摂取として考察することは貴重である。

東総でも外洋に南面する九十九里地帯は、地曳網漁業で繁栄した村落である。岩田みゆきの「九十九里浜地曳網漁業地帯における土地移動の実態と性格―飯高家文書「田畑奥印帳」の検討―」は、網元飯高家の経営を克明に分析したものである。作徳米一〇〇〇俵、小作人二三八〜二七三人、水主五〇〜六〇人台の経営は地主であり、網元である飯高家の豪富を示すとともにその特異さをも物語っている。幽学没後門人の多くを出した足川村との関連や地曳網漁業のもつ労働力組織の特異性から江戸時代後期の村落社会分析の指針が隠されているように思う。

木塚久仁子「安政期常陸国土浦町における検地―その顛末と意義―」は、霞ヶ浦を隔てる常陸国といえども、水運の便に恵まれて東総地域とモノ・ヒトの交流の盛んであった常陸土浦町の地誌検地を取り上げている。幕末安政二年（一八五五）土浦藩が行った改革、土浦町御地誌検地は藩政の動向よりむしろこれに関与した地方指導層のあり方を示すものとして極めて注目すべき分析である。

地方巧者として藩に登用された地誌検地を施行する長嶋尉信、町内の新興醬油業者として家をなし、これを国学その他地域の文化振興に投資し地誌に反対する色川三中、天保の町方騒動に連座し、藩から排除され

ながらも関東取締出役の道案内となって勢力騒動の鎮圧に貢献、復活、地誌検地に協力する内田佐衛門、この三者の人間模様が旧来、検地即領主の悪政といった固定観念を打破している。地域社会の活力を担った指導層の動向を丁寧実証している。

川崎史彦「東総地域の教育環境における飲酒―筆子塚の分析を中心―」は、消費社会の浸透の中で苦悶する村や家の指導層がその典型ともいべき飲酒慣行にどのように取り組んでいたかを筆子塚の実地調査をもとに詳細に分析している。

鈴木秀幸の「近代日本の教育と青年―干潟地域の井上勇治郎を中心―」は、幽学没後の東総村落社会の教育を万才村の井上勇治郎という人物を通して追究したものである。井上の生涯は村の近代化で貫かれており、開化啓蒙の地方の実践者であった。学制小学校万才小学校の設立から中等教育の必要を痛感して、私立興東塾を創立する。ここでは旧来の国・漢学に加え、英学や法律・経済にまで包含しようとしている。

菅根幸裕「近世・近代の東総における相模大山信仰」は、幽学の下総布教前からあった大山信仰の実態を在村の参詣資料にもとづいて明らかにしている。特に龍福寺木太刀の詳細な調査と分析は、宝暦十三年（一七六三）のこの地域の大山信仰の浸透を示すものである。

以上、一四論文で大原幽学をキーワードにした東総村落社会史が明らかにされたとはいえない。しかし、先行研究を基盤に新たに組み組まれた個別研究は、問題の所在を各分野で明示してくれる。同時に、これらを横断する地域の歴史像を結実させる今後の目標を指し示してくれている。

最後にこの共同研究に一区切りつけるに当り、明治大学の木村礎先生はじめ地元の大原幽学記念館その他お世話になった方々に深甚なる謝意を表したい。

（国立歴史民俗博物館歴史研究部）